

学長のコラム

モデルナワクチンと副反応

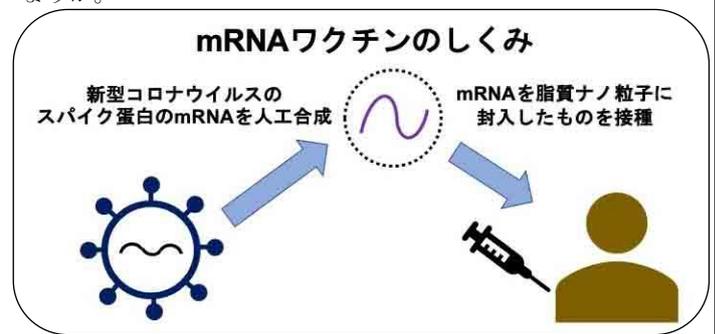
この7月と8月の2回にわたって新型コロナウイルスワクチンの接種を行いました。追加接種希望者についても9月10日までに2回目が終わりと、本学における職域接種が終了しました。全体管理を行って頂いた河瀬事務局長をはじめ接種に携わって頂いた教職員の皆様に感謝致します。今回の職域接種で2回の接種が終了した方は合計1,458人となり、うち学部在生は1,258人で接種率は88.8%でした。本学以外の病院等で接種を受けた学生もいますので、それを加えるとほぼ90%となり、かなり高い接種率だと思います。

さて、今回の職域接種で気になったのが副反応の強さです。私自身は軽い倦怠感で済みましたが、39度台や40度を越える発熱があったり、全身の倦怠感や筋肉痛で苦しんだという報告を聞きました。重篤なアナフィラキシーで緊急搬送されたケースはありませんでしたが、モデルナアームなどの強い副反応のために2回目の接種を断念された方も数名おられます。モデルナやファイザーなどのmRNAワクチンでは副反応が強いことが知られていましたが、確かにmRNAワクチンの特徴に起因する副反応がおこっていたのではないかと思います。

新型コロナウイルスは自身の持つスパイク蛋白が細胞表面のACE2という受容体と結合して細胞内に侵入しますので、mRNAワクチンの製造過程では、まずスパイク蛋白をコードするmRNAを人工合成します(図)。ワクチンを生体に投与すると、このmRNAを設計図として細胞内でスパイク蛋白が作られ、このスパイク蛋白に対して抗体が作られたり、細胞性免疫の誘導がおこります。ところが、mRNAは非常に不安定で体内に投与されるとすぐに分解されてしまうので、脂質ナノ粒子に包んで投与します。脂質ナノ粒子は細胞膜と同様の構造をしていますので、細胞膜と簡単に融合し、mRNAが分解を免れて細

胞内に取り込まれます。ところが、脂質ナノ粒子の成分がアレルギーを起こすことが知られており、人によっては強い副反応を起こすこととなります。余談ですが、更なる工夫としてmRNAワクチンのmRNAには特別な修飾が加えられており、これによってmRNAの分解が遅れ翻訳効率も高まることがわかっており、この仕組みを発見した研究者はノーベル賞の有力候補になっています。

さて、ワクチン接種に関連して抗体価の低下が問題となっており、3回目接種、さらには毎年、ワクチン接種を続けることが必要かも知れません。そうすると、やはり気になるのが副反応です。ワクチン接種を希望しない人たちの大きな理由の一つが副反応の強さと言われています。もし、mRNAワクチン以外のワクチンで、副反応を軽度で抑えることができれば、もっと多くの皆さんにワクチン接種が可能になると考えられます。ご存じの様にKMバイオでは不活化ワクチンを開発中ですが、このワクチンの副反応が従来のインフルエンザワクチン程度のものであれば、mRNAワクチンに拒否反応を示す人たちや小学生以下の低年齢層にもワクチン接種が広がるのではないのでしょうか。



9月・10月・11月の主な行事予定

9/29 (水)	後期授業開始
10/ 8 (金)	国際シンポジウム「The 6th Allied Health Sciences International Symposium 2021」
10/20 (水)	動物慰霊祭
10/23 (土)	学部入試 (総合型選抜)
11/ 6 (土)	学部リハ特別選抜 (社会人)、助産別科推薦入試、大学院推薦選抜・社会人選抜 (I期) 入試
11/20 (土)	学部入試 (学校推薦型選抜) [指定校] [公募]
11/24 (水)	银杏学園理事会

・新型コロナウイルス関連

熊本県に現在適用されている「まん延防止等重点措置」は9月30日(木)まで延長です。本学の「新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動基準」は、後期のスタート(9/27)に合わせてレベル「3」に引き下げられますが、引き続き感染対策に努めましょう!

事実を伝える大切さ—事実と意見を区別する—

戸渡准教授は9月13日(金)に3103S講義室で9月27日(月)から2週間実施される公衆衛生看護実習ⅡBの事前学習を実施しました。事前学習は保健師選抜生(4年生20名)を対象に実施。今回初めてアカデミックスキル支援センターがその一部を担当し、『事実』を伝える～その意義と方法～と題して渡邊元生客員教授が話をされました。

本講義は実習中に役立つ文章指導ができないかと思案していた看護学科教員とアカデミックスキル支援センターの共同で、実現しました。

戸渡洋子准教授は「事実を伝える文章を書くことは、チーム医療を担う看護職に必要なスキルです。SNS等、簡素化された文章でのコミュニケーションが主流になっている世代では、文章を書くことに苦手意識を持っている人も多く、貴重な経験になったと思う。ぜひ、実習記録の作成等にいかして欲しい」と話をされました。(文責：企画・人事課)



第1回情報セキュリティ研修会

8月20日(金)に本学情報セキュリティアドバイザーの菊池先生を講師とする標記研修会を開催しました。今回も会場参加だけでなくZoomによるオンライン中継に加え、研修後1週間の録画視聴も含め108名の教職員にご参加いただきました。研修では、最近のセキュリティ問題だけでなく、情報の機密性格付けについて具体例を交えてわかりやすくご紹介いただきました。

研修会は大変有意義なものとなりましたが、今後も各種訓練など情報セキュリティの啓蒙活動を展開します。教職員の皆様のご理解・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

(文責：総務課)

令和3年度 遠隔授業実践報告会

FDセミナー後引き続きFD委員会主催で、遠隔授業実践報告会が開催されました。まず学生相談・修学サポートセンターの岩村純子講師による報告「障がいのある学生にも配慮した遠隔授業デザイン」があり、学生へのアンケート調査の結果から導き出された遠隔授業デザイン時に配慮すべき点と方法の紹介がありました。その後各学科から実践報告があり、医学検査学科の上妻行則准教授からはPowerPointのノート部分を活用した資料作り、看護学科の堀律子教授からは音声付き講義資料作成時における工夫と課題、リハビリテーション学科言語聴覚学専攻の松原慶吾准教授からは音声付講義スライド・穴埋め式講義サブノート・確認テストの組み合わせによる授業構成について報告がなされました。聴講者からは大変参考になったという意見が多く寄せられましたので、今後とも定期的に学内のすぐれた取り組みを共有する機会を設けていく予定です。

(文責：FD委員長 渡辺雄一)

今月の1枚(随時掲載)

- お心遣いに感謝 -



花瓶に活けられた「ダリア」の花 (撮影・文責：企画・人事課)

本学1号館事務室に近い来客用・教職員用トイレの洗面台の傍らには毎日のように花瓶にお花が活けてあります。本学を清掃して下さる株式会社 三勢さんが掃除の際に活けていかれるものです。手を洗う時、ふと目に留まる花。心温まる瞬間です。いつもありがとうございます。ごさいます。

令和3年度 第1回FDセミナー

令和3年8月31日(火)に今年度第1回FDセミナーを開催いたしました。テーマは「遠隔授業における著作物利用」で、講師には東京都立大学大学院法学政治学研究科の山神清和教授をお迎えしました。Zoomを使った遠隔による研修会で、本学からの参加者は107名、加えて崇城大学からも7名の参加がありました。昨年度全国で導入された遠隔授業は「公衆送信」に相当し、著作物利用に関し「授業目的公衆送信補償金制度」が前倒しで始まったのですが、グレーゾーンも多く、教員は不確かさを抱えながら遠隔授業を行ってきたのが実情です。

最初に基本編として著作権の種類、権利の侵害となる場合、改正著作権法第35条の読み方と使い方について解説がありました。続いて応用編としてあらかじめ本学教員から寄せられていた質問に対し一つずつ明快な回答がなされました。最後に当日の参加者からの質問に対して、こちらも大変具体的でわかりやすい回答がありました。山神教授はこの研修会を通し「遠隔授業で他人の著作物を用いる場合に、著作権法上の問題を生じさせないためにはどのようなことに注意すればよいか、各教員が自分で判断できるようになること」を目標として掲げられたが、研修会後のアンケート回答によるとこの目標は十分に達成されたようです。(文責：FD委員長 渡辺雄一)

日本吃音・流暢性障害学会第9回大会 大会参加記



日本吃音・流暢性障害学会とは、吃音及び流暢性障害(クラタリングなど)の研究の発展と、これらの障害の研究や医療・福祉・セルフヘルプグループ活動などに関わる者同士の相互交流を図ることを目的とした学会です。2021年の夏に「未来につなぐ、今日の一步～吃音支援の構築～」というテーマで、熊本保健科学大学が会場となってWEB大会を開催いたしました。新型コロナウイルス拡大防止に基づき現地開催は行えませんでした。大会には約220名が参加され、シンポジウムや演題発表に対するディスカッションも盛んに行われ盛大に大会が運営することができました。慣れないWEB大会ではありましたが、本学の皆様にもご協力いただきまして無事に大会を終了することができましたことは、まことにありがとうございました。吃音や流暢性障害についてご興味のある方は、ぜひ次回大会にご参加ください。

(文責：日本吃音・流暢性障害学会事務局 岩村健司)

私の秘話ヒストリー

今回は地域包括連携医療教育研究センターの竹熊千晶教授に投稿していただきました。

相次いで犬が死んだ。実家の柴犬と我が家のトイプードル。同じ歳だったから、成長して老いていく過程もほぼ一緒。外犬と室内犬、性格の違いはあったが、それぞれの役割を思いっきり果たし、犬(人)生を全うした。柴犬は賢い犬で(親ばかです)杖をついた父のスピードに合わせて歩くような犬だった。大雨の日に川の様子を見に行き(ダメです)堤防で滑って座りこんだ父の側にお座りして離れなかった。父が亡くなった後、犬好きの近所の年寄りが勝手に、いや自主的に散歩に連れていってくれることもしょっちゅうだった。かたや室内犬のトイプードルは、これもある意味賢くて、内弁慶で家族の順位をよくわかっており、自分の目的別に家族を使い分けて甘えていた。どちらの犬も家族によくなつき可愛かった。だんだん耳が遠くなり目がうすくなり、呆けた症状や排泄の失敗も増え、寝ていることも多くなり、人間と同じように老化して、ご飯を食べなくなって死んでいった。

あー、あの犬たちのあごとか腹を撫でまくりたい!迷惑そうにしていたなあ。